

## 徐の偃王物語と夫余の東明王物語

——東夷世界の移動、拡大と物語の伝播——

奥田 尚

はじめに

徐の偃王（えんおう）はほとんど取り上げられることがないのに比し、東明王は東北アジアの夫余の始祖王あるいは高句麗の始祖王として注目されてきた。<sup>1)</sup> もちろんこれは日本史あるいは日朝関係史の視点からの話で、中国神話・伝説あるいは歴史の研究では徐の偃王はよく知られた存在であるようである。<sup>2)</sup>

日本史の観点からいえば、邪馬台国の女王卑弥呼があまりにも有名なために、「東夷世界」というと中国東北部の東部から朝鮮半島、さらに日本列島を想定してしまふ。しかし、中国神話・伝説の世界（夏・殷・周代を含む）での東夷世界は、後の長安（西安）を中心とする黄河中流地域すなわち「中原」の東方一帯を指し、山東半

島から現在の上海など長江下流にかけての沿岸部から中原までの内陸部にいたる広大な地域を指した。春秋・戦国時代を経て秦漢帝国が成立し中原が拡大するのに従って、東夷世界は次第に外周へ押し出されたのである。

東夷世界がこのように移動したことは今日では常識に属するが、少なくとも現在の『後漢書』〔范曄 三九八年（四四五年）の撰〕の段階では、神話・伝説世界での東夷と現実世界の東夷が混同されている。そのことは『後漢書』東夷伝の「東方を夷という。（中略）。夷は九種あり。（中略）。昔、堯、羲仲に命じ嵎夷の暘谷と曰うに宅せしむ。けだし日の出ずる所なり」とあることにも明らかである。中原から見ると太陽の出る方角つまり東方一帯であり、上に神話・伝説世界の東夷として示した場所である。

ところが少し後の部分には「武王、紂を滅ぼし、肅慎来たりて石磬、楛矢を献ず」とあり、後漢代には朝鮮半島のさらに北からシベリアにかけての日本海沿岸内陸部に位置した肅慎をあげており、後漢代の東夷と神話・伝説世界の東夷を混同してしまっている。（肅慎の位置は時代により移動するとしても、現在の東北アジアの範囲にとどまり、中原東方には居住した痕跡はない）。なお、武王は前一

○五〇年ころの人とされ、殷の最後の王の紂を伐ち、周の天下統一を達成した。

さらに続けて「管、蔡は周に畔（そむ）き、すなわち夷狄を招き誘う。周公これを征し、遂に東夷定まる。康王の時、肅慎また至る。後に徐夷、僭号し、すなわち九夷を率いて以て宗周を伐ち、西して河の上に至る。穆王、そのまさに熾（さか）んなるを畏れ、すなわち東方諸侯を分かち、徐の偃王に命じてこれを主せしむ」とある。

管は河南省鄭州の地でここに武王の弟の叔鮮が封じられ、蔡は河南省上蔡県の地で叔鮮の弟の叔奴が封じられた。管叔と蔡叔は武王の死後、殷の紂王の子の武庚禄父とともに、周成王とその重臣の周公旦らに反乱を起こしたものの、平定された。これにより東夷はふたたび周の支配下に入ったといっているのである。康王は武王の孫で周王の第三代で、この時にまた肅慎が来貢したとあるのは、ふたたび東夷がおとなしく支配に服したことを意味するが、ここでも神話・伝説世界の東夷と後漢時代の東夷が混同されている。

徐夷が僭号したとあるが、徐は今の徐州付近の広域の地で、徐地域の支配者が周の支配に反乱を起こして、徐偃王を名のって周から自立したのである。偃王は東夷の

九夷を率いて周を攻め、第五代周王の穆王は、偃王の軍勢が強大であるのを恐れて、東方に封じていた諸侯を分けて偃王に属させたというのである。

『後漢書』には唐の章懷太子（六五一年～六八四年）の注が付されているが、この徐の偃王の部分の章懷太子の注では『博物志』を引用して、偃王の物語が記されている。そこに記された偃王物語は、夫余あるいは高句麗の始祖王の東明王物語に共通する部分があるので、まず偃王物語を紹介し、次いで東明王物語との対比を試み、両物語の要素が共通する背後の事情を考えてみたい。

#### 一 徐の偃王物語の固定

徐の偃王物語は、『後漢書』の章懷太子の注所引の『博物志』、『史記』の唐（六一八年～九〇七年）の張守節の「正義」の巻五と巻四三の両方に引用する『博物志』、『太平御覽』（一〇〇〇年ころの成立）巻九〇四所引の『徐偃王志』、酈道元（？～五二七年）の『水経注』巻八所引の『徐州地理志』（劉成国の著）などに残されている。また、『国学基本叢書』にも張華（二三二年～三〇〇年）の『博物志』として収められているが、これについては、

その依拠する原典が不明なので参考史料としておきたい。これらの史料では字句に若干の相違があるので、まずそれを検討しておこう。

A 『後漢書』章懷太子注所引『博物志』の偃王物語

(その一)

博物志曰。徐君宮人。娠而生卵。以為不祥。棄於水浜。孤独母。有犬名鵠倉。銜所棄卵。銜以歸母。母覆煖之。遂成小兒。生而偃。故以為名。宮人聞之。乃更錄取。長襲為徐君。

B 『史記』卷五の張守節「正義」所引『博物志』の偃王物語

博物志云。徐君宮人。有娠而生卵。以為不祥。棄於水浜。孤独母。有犬鵠蒼。銜所棄卵以歸。覆煖之。乃成小兒。生偃。故宮人聞之。更取養之。及長襲為徐君。後鵠蒼臨死。生角而九尾。化為黃龍。鵠蒼或名后蒼。

C 『史記』卷四三の張守節「正義」所引『博物志』

の偃王物語

博物志云。徐君宮人。娠生卵。以為不祥。棄於水浜。孤独母。有犬名鵠倉。銜所棄卵以歸。覆煖之。遂成小兒。生偃王。故宮人聞之。更收養之。及長襲為徐

君。後鵠倉臨死。生角而九尾。實黃龍也。鵠倉或名后倉。

D 『太平御覽』卷九〇四「獸部一六・狗・上」の偃

王物語

又徐偃王志云。徐君宮人。任娠而產卵。以為不祥。棄於水辺。孤独老母。有犬名鵠倉。獮於水浜。得所棄卵。銜以來歸。独母以為異。覆煖之。遂螭蚬成小兒。生時正偃。故以為名。徐君宮中聞之。乃更錄取收養。長而仁知。襲君徐國。後鵠倉臨死。更生角而九尾。實黃龍也。偃王葬之。徐梁界中。今見有狗襲。王物語

E 『水經注』卷八所引の劉成國『徐州地理志』の偃

王物語

劉成國徐州地理志云。徐偃王之異言。徐君宮人。娠而生卵。以為不祥。棄之于水浜。孤独母。有犬名鵠倉。獮于水側。得棄卵。銜以來歸。孤独母以為異。覆煖之。遂為兒。生時偃。故以為名。徐君宮中聞之。乃更錄取。長而仁智。襲君徐國。後鵠倉臨死。生角而九尾。實黃龍也。偃王葬之徐中。今見有狗襲焉。偃王治國。仁義著聞。欲舟行上國。乃通溝陳蔡之間。得朱弓矢。以得天瑞。遂因名為号。自称徐偃王。江淮諸侯。服從者三十六國。周王聞之。遣使至楚。令

伐之。偃王愛民不闢。遂為楚敗。北走彭城武原東山下。百姓隨者萬數。因名其山為徐山。山上立石室廟。有神靈。民人請禱焉。依文即事。似有符驗。但世代綿遠。難以詳矣。今徐城外。有徐君墓。昔延陵季子。解劍于此。所謂不違心許也。

〔参考〕F 『国学基本叢書』・旧小説一・甲集一・漢魏六朝・張華『博物志』

### 徐偃王

徐偃王志云。徐君宮人。娠而生卵。以為不祥。棄之水浜。独孤母。有犬名鵠蒼。獮於水浜。得所棄卵。銜以東歸。独孤母以為異。覆煖之。遂螭成兒。生時正偃。故以為名。徐君宮中聞之。乃更錄取。長而仁智。襲君徐國。後鵠蒼臨死。生角而九尾。實黃龍也。偃王又葬之徐界中。今見存狗壘。偃王既主其國。仁義著聞。欲舟行上國。乃通溝陳蔡之間。得朱弓矢。以己得天瑞。遂因名為弓。自称徐偃王。江淮諸侯皆伏從。伏從者三十六國。周王聞遣使乘駟一日至楚。使伐之。偃王仁。不忍殘害其民。為楚所敗。逃走彭城武原東山下。百姓隨之者以萬數。後遂名其山為徐山。山上立石室。有神靈。民人祈禱。今皆見存。

以上の六種類の史料の相違点をまとめ、採用すべき字句を決めたい。

(1) 妊娠して卵を生む

A 娠而生卵。 B 有娠而生卵。 C 娠生卵。 D 任娠而産卵。

E 娠而生卵。 F 娠而生卵。

大差はないが、A・E・Fの「娠而生卵」を採用する。

(2) 水のほとりに棄てる

A 棄於水浜。 B 棄於水浜。 C 棄於水浜。 D 棄於水辺。

E 棄之于水浜。 F 棄之水浜。

「水浜」でも「水辺」でも、水のほとりを示し大差はない。棄の目的語のあるE「棄之于水浜」を採用する。

(3) 母（に対する形容）

A 孤独母。 B 孤独母。 C 孤独母。 D 孤独老母。 E 孤独

母。 F 孤独母。

A・B・C・Eの「孤独母」を採る。通常、「孤」は

〔父母のない〕みなしご〕を意味し、「独」は〔配偶者が

いない〕ひとりもの〕を意味する。「みなしごやひとり

もの」の養育をした母〕とでもいう意味であろうか。

(4) 犬の名

A 鵠倉。 B 鵠蒼。 C 鵠倉。 D 鵠倉。 E 鵠倉。 F 鵠蒼。

「鵠」は「白鳥のように大きくて白い鳥」、あるいはそ

れから転じて「白」や「大」の意味である。「卵」を主題とするので鳥に関する字の「鵠」が使用されたのであろう。「倉」と「蒼」は音が同一なのでどちらでもよい。

多数なので「鵠倉」を採る。

(5) 犬が卵をくわえて帰る

A 持所棄卵。銜以婦母。

B 銜所棄卵以婦。

C 銜所棄卵以婦。

D 獵於水浜。得所棄卵。銜以來婦。

E 獵于水側。得棄卵。銜以來婦。

F 獵於水浜。得所棄卵。銜以東婦。

D・Fの「獵於水浜」、Eの「獵于水側」は、犬の行動を説明した文章である。それがなければ意味が通じないわけではないが、あっても不自然ではないので、Eの「獵于水側」を採用する。以下の文章はA・D・E・F群とB・C群に分かれるが、Dの「得所棄卵。銜以來婦」に、「婦」の目的語があるAを加味して、「得所棄卵。銜以來婦」とする。

(6) 卵を覆い暖める

A 母覆煖之。

B 覆煖之。

C 覆煖之。

D 独母以為異。覆煖之。

E 孤独母以為異。覆煖之。

F 孤独母以為異。覆煖之。

B・Cでは犬が卵を覆い暖めることになる。それでは前文に母が出ている意味がないから、卵を覆い暖める主語は母である。母が卵を暖める理由が記されている方がよいから、Eの「孤独母以為異。覆煖之」を採る。

(7) 卵から子が生まれる

A 遂成小兒。生而偃。故以為名。

B 乃成小兒。生偃。

C 遂成小兒。生偃王。

D 遂螭成小兒。生時正偃。故以為名。

E 遂成兒。生時偃。故以為名。

F 遂螭成兒。生時正偃。故以為名。

「偃」や「正偃」は意味がとりにくいから、Aに続いて章懐太子の注は『尸子』を引用して、「尸子曰。偃王有筋而无骨。故曰偃也（尸子に曰く、偃王は筋あるも骨なし。故に偃と曰うなり）」とある。「偃」は「横たわる」ということで、「正偃」は「まさに偃なり」ということである。生まれた子は手足や背を丸め産声を上げるだろう。

から、そうした状態ではなく手足も背中も伸ばして横たわった状態で生まれたことを意味するのであろう。

「蚺螂」や「蚺」の意味はわからないので、ここでは省略することとした。また特別にこうした記述がなくとも差し支えないようであり、Aの「遂成小兒。生而偃。故以為名」を採りたい。

(8) 宮人の対応

A 宮人聞之。乃更録取。

B 故宮人聞之。更取養之。

C 故宮人聞之。更取養之。

D 徐君宮中聞之。乃更録取收養。

E 徐君宮中聞之。乃更録取。

F 徐君宮中聞之。乃更録取。

Aなどの「録取」は、よく調べた上で自分のものとするという意味であろう。そうすれば宮人という個人よりも、宮廷を指す宮中の方がよい。もっとも丁寧な表現のD「徐君宮中聞之。乃更録取收養」を採る。

(9) 成長して君となる

A 長襲為徐君。

B 及長襲為徐君。

C 及長襲為徐君。

D 長而仁知。襲君徐国。

E 長而仁智。襲君徐国。

F 長而仁智。襲君徐国。

『後漢書』東夷伝の本文に「偃王、潢池の東に處す。地は方五百里なり。仁義を行ひ、地を陸して朝する者三十有六国」とあり、偃王の仁義が記されており、D・E・Fの仁智につながる。Dの「仁知」とEの「仁智」は同一であるが、E「長而仁智。襲君徐国」を採る。

(10) 犬の後日談

これはB・C・D・E・Fにみられるものであり、もともと偃王物語に付属したものであろう。細部には小異はあるが、Eを採りたい。それにB・Cに記されている犬の別名を加えたい。

以上の考察で固定した徐の偃王物語の前半部は、次のようになる。

G 徐の偃王物語の前半

徐君宮人。娠而生卵。以為不祥。棄之于水濱。孤独母。有犬名鵠倉。獵于水側。得所棄卵。銜以來歸母。孤独母以為異。覆煖之。遂成小兒。生而偃。故以為名。徐君宮中聞之。乃更録取收養。長而仁智。襲君徐国。後鵠倉臨死。生角而九尾。実黄龍也。鵠倉或

名后倉。偃王葬之徐中。今見有狗鼯焉。

E 『水経注』ならびに参考資料Fには物語の続きがある。『後漢書』東夷伝の別部分の章懐太子の注にも『博物志』を引用して続きの部分を書すが、B・C 『史記』所引『博物志』とD 『太平御覧』にはその部分がない。とりあえず『後漢書』に引用される続きの部分を書記しておこう。

H 『後漢書』章懐太子注所引『博物志』の偃王物語  
(その二)

博物志曰。徐王妖異不常。武原東十里。見有徐山石室祠處。偃王溝通陳蔡之間。得朱弓矢。以己得天瑞。自称偃王。穆王聞之。遣使乘駟一日至。楚伐之。偃王仁。不忍鬪。為楚所敗。北走此山也。

E・Fと比べるとかなりの相違がみられる。ただし『後漢書』東夷伝の本文には次のように記されている(一部分は既に引用)。

I 『後漢書』東夷伝

偃王處潢池東。地方五百里。行仁義。陸地而朝者三十有六國。穆王後得驥騮。乃使造父御以告楚。令伐徐。一日而至。於是楚文王大擧兵而滅之。偃王仁而無權。不忍鬪其人。故致於敗。乃北走彭城武原東

山下。百姓隨之者以万數。因名其山為徐山。

HとIを適宜案配すれば、E・Fに似てくることは明らかである。このことから考えて、偃王物語の後半部分は、Eの当該部分とみてよい。なお、偃王の反乱については『史記』卷五・秦本紀に「(周繆王)西巡狩。樂而忘歸。徐偃王作乱。造父為繆王御。長馭歸周。一日千里。以救乱。繆王以趙城封造父」(繆王は穆王の異表記)とあり、卷四三にも同内容の記事がある。

## 二 偃王物語と東明王物語

前項で固定した徐の偃王物語を段落に分けながら、まとめて紹介しておこう。『尸子』卷下には「徐偃王好怪。没深水而得怪魚。入深山而得怪獸者。多列於庭(徐の偃王、怪を好み、深く水に没して怪魚を得、深山に入りて怪獸を得。多く廷に列す)。」とある。すでに引用したように、同書には「偃王有筋而無骨」ともあった。偃王物語は本来はさらに長大であったが、それが省略変形されて現存するような物語になったのであろう。

(1) 徐君の宮人は妊娠して卵を生んだ。これを不祥とみ

なして、卵を水辺に棄てた。

(2) みなしごやひとりみの者たちを母のように養育する者があり、彼女は鵠倉という名の犬を飼っていた。その犬は水辺に食を求めて、棄てられていた卵をくわえて彼女のところへ戻った。彼女は不思議なことだと思いい、その卵を覆うようにして暖めた。

(3) 卵から子が生まれたが、(通常の子と違い)寝そべるように横たわって生まれた。そこで名を偃(横たわる)とつけた。

(4) 徐君の宮廷ではそのことを聞き、いろいろと子の誕生の次第を調べた上で、宮中に迎えて養育した。

(5) その子は成長すると仁智を備え、(先代の徐君の)後をつぎ徐国の君となった。

(6) その後、犬の鵠倉は死に臨んで、頭には角が生え、尾は九尾となった。実は黄龍(の化身)であった。鵠倉のまたの名は后倉である。偃王がその犬を葬った場所は、徐国の中であり、現在も「狗壘(くろう/いぬづか)」が残っている。

(7) 徐王が国を治めにつれ、その仁義は有名となっていった。偃王は上国(周)へ舟で行きたいと思いい、陳と蔡の間に溝(運河)を通じさせたが、その時に朱色

の弓矢を得た。その弓矢を得たことで、自分は天瑞を得ることができたとして、自分の名を号として徐偃王と自称した。

(8) 付近の淮・江の諸侯で偃王に服従する者が三六国に及んだ。天下を支配していた周王(穆王)はこれを聞いて、使者を楚に派遣して偃王を伐たせた。偃王は愛民の心があり闘わずして、楚に敗北した。

(9) 敗北した偃王は北に走り、彭城武原県東山下に逃れた。万を超える人びとが偃王に随って移住した。それでその山の名を徐山とし、その山上に石室の廟を立てた。

(10) その廟には神霊が宿り、人びとは祈るときには文を書いて割り符のようにするというが、はるかに世代を隔てた古いことなので詳細は明らかにし難い。今、徐城の外には徐君の墓がある。昔、延陵の季子はその場所を剣を解いたが、それは心の許すところに違いたくないということからである。

以上の偃王物語の(1)はいわゆる「卵生神話」であり、三品彰英氏によりその分布や意味が検討されている。卵生神話はインドネシアを中心に、中国沿岸部から朝鮮半島、東北アジアに分布するという。中国沿岸部には東夷



系と南方系住民が境を接して居住し、この地域一帯に卵生神話などの海洋民族的文化が流布していた。それが春秋戦国期から漢民族が東進してきたために、東夷系は北へ、南方系は南へ押し分けられたと想定している。

鳥の卵と王の誕生の物語というと、『史記』卷三・殷本紀の次の史料が有名である。

丁 『史記』卷三・殷本紀

殷契。母曰簡狄。有娥之女。為帝譽次妃。三人行浴。

見玄鳥墮其卵。簡狄取吞之。因孕生契。契長而佐禹治水有功。

玄鳥（一般に燕（つばめ）と見なされている）がおとした卵を簡狄が吞んで、殷の始祖の契（せつ）を生んだというものである。簡狄という女性が卵を吞んで妊娠したとあるが、これは「卵生神話」の変形とみてよい。

これに関しては後に再び触れることとして、夫余または高句麗の始祖王の物語である東明王物語をみておこう。夫余と高句麗の東明王物語は酷似しているが、ここでは史料的にみて古い夫余の東明王物語を紹介したい。

K 『論衡』（後漢の王充（二七年～一〇〇年）の著）

北夷婁離國王侍婢。有娠。王欲殺之。婢對曰。有氣大如鷄子。從天而下我。故有娠。後產子。捐於豬溷

中。豬以口氣噓之。不死。復徙置馬欄中。欲使馬藉殺之。馬復以口氣噓之。不死。王疑以為天子。令母收取。奴畜之。名東明。令牧牛馬。東明善射。王恐奪其國也。欲殺之。東明走南。至掩淲水。以弓擊水。魚鼈浮為橋。東明得度。魚鼈解散。追兵不得渡。因都王夫余。

この東明王物語を段落分けて訳すと、大略次のようになる。

- (a) 北方に婁離国があり、その王の侍婢が妊娠した。王は侍婢を殺そうとした。
- (b) 侍婢は、鷄の子（卵）のような『氣』があつて、私に來たり下つたので、妊娠した、と告げた。その後には子が生まれた。
- (c) 王はその子を猪（豚）小屋の中に捨てさせたが、猪が口でその子を吹いた。
- (d) その子を馬小屋に移し、馬に踏み殺させようとしたが、馬も氣をその子に吹き付け、死なせなかった。
- (e) 王は、天子となるのではないかと疑い、その母に引き取らせ、召使いに養育させた。
- (f) その子を東明と名づけ、牛馬を牧する仕事につかせた。

(g) 東明は、弓を射ることに優れていた。

(h) 王は、東明が国を奪うことを恐れて、殺そうとした。東明は、逃れて南へ走り、掩流水に至った。

(i) 東明が、掩流水の水を弓で撃つと、魚鼈が浮かび上がり橋をつくった。東明は、それにより渡ることができたが、魚鼈はすぐに解散したので、追兵は渡ることができなかった。

(j) よって東明は、夫余の地に都をつくり王となった。

(c)・(d) については、周の始祖の後稷の誕生物語と酷似することなどについては、よく知られているところであるし、別稿でも検討したので、ここではこれ以上触れない。本稿で注目したいのは、(b)の卵のような気、

(g)・(i)の弓、(h)・(i)の水である。

(b) 卵のような気により妊娠するのは、Jの簡狄の妊娠事情に通じる部分があり、その直接的な表現は偃王の物語の(1)にみられる。むしろ逆に、偃王物語(1)の卵を生む形が原型であり、そこからJの卵を呑んで妊娠する、東明王物語(b)の卵のような気により妊娠するなどの派生型が生じたのであろう。

(g)・(i)の弓は、偃王の物語の(7)にみえる。

(h)・(i)の水は、偃王の物語の(1)の水浜や、(7)の溝の

要素である。

要するに、夫余の東明王物語は、その淵源を殷の始祖の契の誕生物語、またおそらくそれと同根のところから発生した徐の偃王物語、さらには周の始祖の後稷の物語に求めることができる。

また現在の偃王物語には直接関係する部分が残されていないが、東明王物語の(i)の魚や鼈が橋をつくる話も中国に先例を求めることができる。『竹書紀年』(原本は二七九年以前の成立。今本は偽作部分を含むといわれる)穆王三十七年条に「伐楚。大起九師。東至于九江。叱鼈鼉(げんたノかめわに)。以為梁」とあり、穆王は大亀や大鱉を叱りつけて梁すなわち橋をつくらせる。これは東明王が弓で水面をたたいて(ということとは水の神を弓で脅しつけた結果)、魚や鼈が橋をつくる話に酷似する。なお、袁珂氏はこの話は楚を伐つ時のことではなく、徐偃王打倒の時とする説を支持している。袁珂説でよければ、偃王物語には穆王との戦いの場面があって、大亀や大鱉が橋をつくる話が元来は存在していたかもしれない。それはともかくとして、この穆王の話を含めて上述した殷や周の物語が夫余の物語に影響を与える背景を述べ、まとめに代えたい。

## まとめに代えて

すでに触れたように、殷末から周初にかけての東夷世界は、山東半島の基部や以南の沿海内陸部など、まさに殷や周の都から見て東方に広がる世界であった。殷末から周初にかけての東夷世界を解明した古典的かつ基本的な論文に、貝塚茂樹氏の研究があることは有名である。この貝塚氏の研究から、偃王の支配した徐の地域に関する部分に焦点をあてて、その成果を紹介しておきたい。

周の武王は殷の紂王を打倒して殷を滅亡させたが、殷の祭祀は殷の旧領土に封じた武王の子の武庚禄父に継承させた。武庚禄父は一人の人名とする『史記』の説があるが、『論衡』などの二人の人名説が妥当である。武庚は殷の故都（今の安陽付近）に封じられ、禄父は梁山（山東西部の平原中の小丘陵、後世の『水滸伝』の梁山泊の地）出土の銅器の銘文から見て、梁山に封じられた。武庚は周に反乱を起こし、これに禄父も加担し、周公旦や召公奭（せき）を中心とする周に平定された。周公旦や召公奭は山東半島の渤海沿岸まで大遠征を行い、その恩賞として周の成王は召公奭に徐地域を与えた。

実際に徐地域を支配したのは、奭の長弟の燕侯Ⅱ匭侯旨であり、燕侯Ⅱ匭侯の号の「燕（えん）・匭（えん）」は、旨が拠点とした奄国（後の魯国の都の曲阜に所在）の「奄（えん）」による。この匭侯旨が投影され、伝説化されたものが徐偃王であろう。

一方、召侯奭は『史記』に燕国（今の北京付近から南方にかけての地域）に封じられたとあるが、易州出土の銅器の銘文から見て、これは燕侯旨が易州に封じられた史実を修飾したものである。燕侯旨が易州に移封されたのは、周公旦の長子の伯禽が匭つまり奄に封じられたためである。『史記』では周公旦が魯（匭つまり奄）に封じられたとするが、これは伯禽の史実を背景とする修飾である。なお、燕国出土銅器の銘文では、「燕」を「匭」と記している。

以上の貝塚氏の研究によれば、殷の祭祀が梁山で継承されているから、殷の始祖の契の卵生神話もこの地に継承されたはずである。（本来、殷は東夷の出身であるともいわれ、卵生神話はこの地域一帯に存在した可能性もある）。周初に梁山を含む地域に封じられたのは燕侯Ⅱ匭侯旨であり、彼が伝説化された像が偃王物語の主人公の偃王である。旨は兄である周初の主要重臣の召侯奭に代わって徐

地域を支配しており、その支配に従い周の始祖の物語である后稷の物語はこの地に広がったと推定できる。殷や周の始祖の物語は、このようにして徐地域に浸透し、偃王物語に影響を与えたと考えられる。

燕侯旨が燕国の南部の易州に移封されると、旨の伝説的投影像である偃王物語も燕国に広まったに違いない。

燕が遼西から遼東へと支配を広げるに従い、偃王物語の伝達範囲も広がっていく。さらに本来の東夷の中心と見なされていた匭・燕が北方の地域名として定着すると、それにつれて東夷の範囲も移動した。さらに燕が東方の遼東などに支配権を広げると、東夷世界も東方へ移動し、中国東北部から朝鮮半島を含む地域の名称となった。

東夷世界のこのような移動と拡大を考えれば、東夷世界にあって覇を唱えようとする王は、その移動と拡大の原動力であった燕国の始祖の物語に似せて、自己の始祖の物語を作為するのは当然のことである。このように考えれば、偃王物語と東明王物語が共通要素を持つ背景が容易に理解できる。従来、東明王物語は東北アジアの自生的な物語として考察されることが多かったが、自生的な要素よりも、本稿で述べたように偃王物語に淵源を持つと推測した上で考察すべきであろう。

もちろん、こうした物語の継承は、匭(曲阜)から燕へ旨が移封されたことに典型的であるように、人的集団の移動を背景とするのであり、秦漢帝国の出現にともなう東北アジアへの中国本土からの人的集団の移動が、東明王物語を成立させる大きな要素であった。

貝塚氏は別に、燕侯旨が奄に初封された時に、箕侯すなわち箕氏を領内に安堵したという事蹟が、燕国遺民によって伝説化して朝鮮に伝播されたものが箕子朝鮮開国伝説であるとす<sup>8)</sup>。燕国の始祖の燕侯旨が保護した箕子の行跡が物語化して東夷世界に広まるのと軌を一にして、燕侯旨の存在を投影した偃王物語が東夷世界に広まったと考えられるのである。

#### 注

- (1) 「東明王物語」を扱った主要な業績には次のようなものがある。白鳥庫吉「夫餘国の始祖東明王の伝説に就いて」(『白鳥庫吉全集』第五卷・一九七〇年・岩波書店) 原発表年一九三六年/池内宏「高句麗建国伝説と史上の事実」(同『満鮮史研究・上世編』一九五一年) 原発表年一九四一年/李成市「『梁書』高句麗伝と東明王伝説」(早稲田大学東洋史研究室編『中国正史の基礎的研究』一九八四年・早稲田大学出版部)/高寛

敏「高句麗の建国神話と夫餘」(『古代文化』四二一  
一・一九九〇年)／神崎勝「夫餘・高句麗の建国伝承  
と百濟王家の始祖伝承」(佐伯有清古稀記念会『日本  
古代の伝承と東アジア』・一九九五年・吉川弘文館)  
など。

(2)

「徐偃王」に関する管見した業績。白川静『中国の神  
話』(一九七五年・中央公論社)／袁珂著・鈴木博訳  
『中国の神話伝説』上巻(一九九三年・青土社)など。  
三品彰英『神話と文化領域』(三品彰英著作集)第三

(3)

卷・一九七一年・平凡社／原著発表は一九四八年)  
本学のアジア文化研究会の編で来春に刊行する論文集  
に収載予定。

(4)

袁珂著・鈴木博訳『前掲書』三八二頁

(5)

貝塚茂樹「殷末周初の東方経営に就いて」(『貝塚茂樹  
著作集』第三卷・一九七七年・中央公論社) 原発表年  
一九四〇年。

(6)

貝塚茂樹『前掲書』一五八頁。

(7)

貝塚茂樹『前掲書』一六四頁。

(8)